

A 日 程

〈出典一覧〉

国語	吉田元	「廃屋の夏」『ちいさな桃源郷』一部改変	幻戯書房
国語	中村義雄、小内一明	校注『宇治拾遺物語 古本説話集』（新日本古典文学大系 42）一部改変	岩波書店
国語	永田希	『再読だけが創造的な読書術である』一部改変	筑摩書房
日本史	三和良一、原朗	『近現代日本経済史要覧』掲載のデータを本学にてグラフに加工	東京大学出版
日本史		石包丁	佐賀県提供
日本史		男衾三郎絵巻	東京国立博物館蔵 ColBase (https://colbase.nich.go.jp/)
日本史		尾張名所図会	国立公文書館デジタルアーカイブ
世界史		エラスムス像	サイネット株式会社

第一問【共通問題 現代文】

(一) 次の文章は、北海道根室地方を舞台としたものである。馬道とはかつて薪炭の材料を求めて、またできあがった炭を運ぶために道産馬が通った道であるが、今ではほとんど利用されなくなっている。以上を踏まえて文章を読み、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語については、注を参照しなさい。

湖畔に発した馬道を西の方に^{*}一里ほど奥に入ると、道の右手に、ひときわ小高い丘が見えてくる。笹におおれた頂には、立枯れたり、落雷に無残に引き裂かれて黒焦げになった数本のミズナラの巨木が天にそり立っている。

この丘の南側の麓のオマナシの林のなげに、平らな草原があつて、その草の中の一本の大きなオニグルミの木^①の傍に、ひとむれの古い牧舎が建っている。馬道をたどる連中の間^②にだけ通じることばで、親しみをこめて「牧場」と呼ばれている場所がそれだ。かれらは牧場の気のいい主人と戸端に酒を酌み交したり、暑い夏の日の午後、オニグルミの木かげに涼をとりながら、あれこれ世間話にふけた思い出を持っている。

馬道に面した木戸を入ると、長年、荷馬車が踏み固めて通った轍道が二本のあざやかな筋を描いて、深い草の中をずうつと牧舎の方へびていく。まん中の盛り上がった土の部分には、オオバコや、シバ草が茂り、地上で餌を拾っていた小鳥の姿がバツタの群れのようにパラパラとびたつと、路傍の茂みに、まっさかさまにさりこむ。だが、すぐ草の茎を這い上がってくると、はるか遠い先の道に下りて、また餌をあさり始める。木戸から牧舎までは、そう、かれこれ^{*}二百間近くはある。

牧舎はこつい木枠によつて、しつかりはめ込まれた二重窓を持つ、一見、ロシア兵舎風の母屋と、苔の生えた急な傾斜をみせる草葺き屋根の馬屋を中心に、へしゆがんだ飼料小屋と納屋^③がついている。母屋の前庭には、はねつるべ、馬屋の大きな吊り戸の外には、ニレの木作りのいかにも頑丈げな追込みがある。その用材の太さや、風雨にいためつけられた木目の深さは、牧場がよほど

の昔、^④辺りに樹木が有り余っていた時代に作られたものだということを教えている。

牧場は住まい手失つてから、もうだいぶんになる——というのは、わたしがいつ通るかかって、まだ一度も人かげを見たことがないからだ。

たしかに、ここでは自然はその^⑤ X を取り返しつつある。雑草は牧舎に押し寄せ、人間の背丈ほどもあるヤマハハコやエゾニニウの花が、風に揺れるがままに母屋の窓ガラスをすりながら、布の隙間から、家の内をのそきこんでいる。クロユリやエゾリンドウは、空しくなった人間の営みを憶むもののように、かつてトウモロコシ畑や、花畑や、牧草地だった辺りに、乱れ咲いている。

しかし、ここがまったくの廃墟だといつてしまふわけにはいかない。

ある夏の日、おだやかな夕映えの光が草にふりかかるところだった。馬道をたどつて来たわたしは、深い草の彼方の一群の牧畜のたたくまいに、思わず目を奪われた。牧場がいさゝきと思つている。牧舎の意は鮮明なルビー色に染まり、静まりかえつて大気をうめいて、馬屋の高い屋根の上からは、風向計のプロペラの音が、ひときわ高らかにカラカラと聞こえてきた。牧場の誰かが帰つて来たのだ。牧場主かもしれない。そうにちがいない。ヤマナシの林の外れでは、一頭の乗用車のアングルマンが無心に草を食んでいた。時折、馬は頭を上げ、伸び上がるようにして、草深い牧舎の方を見る。母屋の玄関を出て、草原を近づいて来た主人が、自分の背に鞍を投げかけ、牧場の見回りに出かけるのを待つてでもいるかのようだ。

「誰かいますか」

わたしは母屋の前庭に立つて、そう呼びかけた。い衝動にかられた。しかし、さすがにそうはしなかった。答える声などあるはずがない。家の内はコトリともせず、さきほど、馬道に立つて、煙筒の煙と見えた雲が、いまは牧舎の背後の空深く、丘の巨大な枯木の彼方に流れ去つて行くところだ。風向計のプロペラも、いつの間にか、鳴りをひそめている。

「誰かいますか」

^② それでも、わたしは、やはり声に出して聞いかけないではいられなかった。牧舎の裏手の山ブドウの茂みの辺りで、タベを鳴く小鳥のだけが聞こえてきた。それはそれで満足だった。わたしは自分の一生で、そう幾つとはない重大な荷物の一つを無事に下ろしたような気がした。

わたしは馬屋の追込みの欄のところに歩いていて、しばらく、たそがれてゆく無人の牧場を見ていた。草はすでに暮れ、小鳥の声は闇に沈んで、オニグルミの梢を夜風がひそやかに渡りはじめていた。

いつも磨きたてた乗馬靴をはき、見事なトロットで馬を走らせながら、丘の上に夕暮れを迎えに行くのが好きだったという牧場の主、眼下に横たわる広漠とした風景を指さしながら、ここからは自分の一生が全部見渡せると話して聞かせるのを常としたというその男は、どんな人間だったのだろう——このときから、わたしの心の奥深くに、おりにふれて、馬道の連中から聞いた牧場主という人のことが、重く鎮してはなれなくなった。そして、幾度かこの同じ場所をおとすれながら、さほど気にもとめなかった風景——母屋の軒下にきらんと積まれた薪の山や、欄の土に干されたままになっているゴム長や、母屋の玄関戸にぶら下がっている一枚の小さな板ぎれに書かれた「外出中」の文字が、鋭く心に突きささってきた。

^③ ただそれだけのことなのだ。あれから数年が過ぎたが、それ以後、草の中の廃墟の牧場について、つけ加える知識をなにも持たない。しかし、オニグルミの木の傍の、あの好ましい牧舎のたすまいや、去つていった牧場のひとびと、それに馬道に出会った男たちへの想いだけは、年ごとに豊かになってくる。そして、あの夏の日の夕暮れ、牧場の母屋の玄関で、もし声をかけないでしまつたら、わたしは、そのことを一生やむにちがいないと思う。あの時、わたしの生涯における重要な一瞬が、重くしく、しかも事もなくに通り返していつたのだという思いに変わりはしない。ヤクシユベツ川下流地方一帯の地域で、近く国営パイロット・ファームの建設が始まると聞かされてから、その思いは、いっそう激しく心を打つてくる。

(吉田 元「廃屋の夏」)

注

* 一里……………約三・九キロメートル。

* 二百間……………間は約一・八メートル、二百間は約二六〇メートル。

* ゴム長……………ゴム製の長靴。

* パイロット・ファーム……………近代経営の形態をとる先進的実験農場。ここでは廃墟となった牧場作りかえることを指している。

問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a ① b ②

① 施^a ② 納屋^b

問2 ① そそり立っている と同様の意味の熟語として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ③

ア 屹立^④ イ 樹立 ウ 鼎立^⑤ エ 直立 オ 佇立^⑥

問 3

空欄 **X** にはいる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
 解答番号は **4**

- ア 創造力 イ 忍耐力 ウ 対話力 エ 支配力 オ 反発力

問 4

I の部分について、次にあげた「鑑賞文」を読み、続く問いに答えなさい。

「鑑賞文」

色彩豊かなこの美しい風景には、(わたし)の空想も混じっている。牧場主も馬も、(わたし)の眼前にはいないのである。それは **A** ことによって裏づけられよう。それでは、なぜ(わたし)はこの風景を想像したのであるうか。そこに昏号しているものとして、感覚に対する働きかけ、具体的には、色と音とがいきいきと **B** を喚起する力が挙げられるであろう。牧舎の窓は荒廃を払拭する赤い光に満たされている。炬燵を思い起こさせる色は、風向計のプロペラの音をにぎやかなおしゃべりに変える。(わたし)は、馬道をたどる連中から「気のいい主人」の話を聞いていたものの、(わたし)自身は、ここに「まだ一度も人かげを見たことがない」と語っていた。このような状況を踏まえると、自然の偶然と相まって、(わたし)の **C** が、単なる夏の夕景を特別な風景(わたし)にとっての意味深い時としてとらえさせるに至ったと考えられるのである。

(1)

空欄 **A** にはいる描写として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
 解答番号は **5**

- ア 牧舎がよほどの昔に作られたとみえる
 イ 風向計のプロペラが鳴りをひそめた
 ウ (わたし)が「そうにちがいない」と念を押している
 エ 馬の描写は詳しいが、牧場主は登場していない
 オ (わたし)がこの後呼びかけるのをためらっている

(2)

空欄 **B** にはいる語句として、もっとも適切なものを本文中から五字で抜き出し、記しなさい。
 解答番号は **6**

(3)

空欄 **C** にはいる語句として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
 解答番号は **7**

- ア 不思議への期待
 イ 炬燵への渴望
 ウ 馬道の男たちへの疑い
 エ 座敷への畏れ
 オ 牧場主への憧れ

問 5

それでも、わたしは、やはり声に出して問いかけないではいられなかった。とあるが、声に出したのはなぜだと考えられるか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は **8**

- ア 自分が今ただ一人という圧迫感から逃れたいとの思いがあったから
 イ 自分の空想を現実のものとして見たいとの願望があったから
 ウ 自分の空想が間違いで、人が隠れている可能性があったから
 エ さきほどまで聞こえていた音が聞こえない恐怖があったから
 オ 刻一刻とたそがれてゆき、残された時間があまりなかったから

問 6

わたしは自分の一生で、そう幾つとはない重大な荷物の一つを無事に下ろしたような気がした。③ について、次の問いに答えなさい。

(1)

この表現からうかがえる(わたし)の心情として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は **9**

- ア 馬道をたどる連中の話にしか存在していなかった牧場主をはっきりと自分の感覚でつかみ、その実在を証明した高揚感
 イ 時として人間の安否さえ疑わせる自然の力を知り、深く恐れると共に、その緊張から逃れられた解放感
 ウ 夏の短い北海道の残照に生命の最後の輝きを重ね、牧場主に代わって牧場が役目を終えたことを見届けた安堵感
 エ 日常では到底体験できない、見知らぬ人物への強い空想を得られたことで、従来より深い人生観を得られた満足感
 オ 夕映えの美しい座敷の牧場を舞台に、牧場主を思いつつ、聴衆も観客もいない空想の劇を一人で演じきった達成感

(二) この場面は後に、あの時、わたしの生涯における重要な一瞬が、重苦しくしかる事もなげに通りすぎていったのだという思いに変わりはない」と回想されている。「事もなげに」と書くことで示されていることは何か、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 10

- ア 「わたし」をはじめ人間にとつては重大なことであっても、自然における生命の循環の中では些細なことにすぎないということ
- イ 想像たくましく、牧場主の安否を確かめるほど緊迫した「わたし」の思いも、現実に戻ればたわいのないものであったこと
- ウ 牧場主の返事を期待して声をかけたが、「わたし」が得たものは小鳥の声であったという肩透かしに人生の無常を感じたこと
- エ 「外出中」の文字を残し、慎ましやかに去った牧場主同様「わたし」にとつての牧場もきれいな去り際であったこと
- オ 「わたし」は牧場を廃墟とはいえないと思っていたが、結局は、廃墟に転落してしまったという無念を感じていること

問 7 ④ ただそれだけのことなのだ」とあるが、「それだけ」の内容として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 11

- ア 夏の夕暮れ時、廃墟となった牧場で印象的な時を過ごしてから、牧場の主人やその人となりを表す風景が特別なものとして忘れられなくなった
- イ 雑草のはびこる牧場が輝きを取り戻す様子を見たものの、それは一瞬に過ぎず、結局牧場が廃墟となるにつれ、忘却のかなたにうずもれることとなった
- ウ 牧場の主人は「外出中」の札をかけ、いつ戻ってもよいように整えて去ったので、牧場は人が戻りさえすればすぐにかつての賑わいを取り戻せると確信した
- エ 夏の夕映えの光によって意外な空想が浮かび、さらにそれによって今まではさほど気にもとめなかった風景に、特別な価値を与えることになった
- オ 馬道をたどる連中から聞いた話の通りの「気のいい」人柄を思わせる牧場の主人と、空想の中ではあるが、もう少して会えるところまで近づいた

問 8 ⑤ 近く国営バイロット・ファームの建設が始まると聞かされてから、その思いは、いつそう激しく心を打つてくる」とあるが、それはなぜか、その理由を三十五字以内で記しなさい。解答番号は 12

(二) 次の問いに答えなさい。

問 1 次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれア～エの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 13・14・15

- 13 キュウヘイな考え方を打ち破る
- ア 立ち仕事でヘイする
- イ シヘイを小銭にくずす
- ウ カーテンで日光をシャヘイする
- エ 息詰まるヘイソク感
- 14 近隣の国々とのユウワを図る
- ア ユウシユウを帯びたメロデー
- イ フユウ層向けの商品
- ウ キンユウ機関に勤める
- エ きれいなユウスイで喉を潤す
- 15 わずかな食物でコウを凌ぐ
- ア 家庭における子どものコシヨク問題
- イ コシ眈々と機会をねらう
- ウ ソウコに荷物を預ける
- エ 暖味モコとしてよく分からない

問 2 空欄 X にあてはまるものをア～オの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 16

16 船頭多くして船 X に上る

- ア 天 イ 山 ウ 陸 エ 都 オ 浜

問 3 「二階から目薬」という慣用句と類義的な意味を持つ四字熟語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 17

- ア 悪戦苦闘 イ 一長一短 ウ 堅忍不拔 エ 隔靴搔痒 オ 言語道断

第二問 【選択問題 古文】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語句については、注を参照しなさい。

今は昔、西三条殿の若君、いみじき色好みにておはしましけり。昔の人は、大人びたまふまで、御元服などもしたまはざりけるにこそ。その若君、東の京に思ふ女持ちて、時々おはしけるを、殿、上、「夜歩^①きたまふ」とて、いみじく申したまひければ、人にも知られて、侍の馬を召して、小舎人童一人ばかり具して、殿は西の大宮よりは東、三条より北^②より、二条へ出でて東さまへおはしけるに、美福門の前の程に、東の大宮の方より、人二三百人ばかり、火点^③して、のしりて来、「いかげせんずる。いづくにか隠れんずる」と若君のたまへば、童の申すやう、「昼見候ひつれば、神泉の北の方の御門開きて候ひつ。それに入りて立たせおはしませ」と言へば、馳せ向かひて、北の方の門に入りたまひ、柱の下に屈まりぬ。

火点して過ぐる物どもを見たまへば、手三つ付きて、足一つ付きたる物あり、目一つ付きたる者あり、「早く鬼^④なりけり」と思ふに、物もおぼえずなりぬ。うつふしてあるに、この鬼ども、「ここに人けはひこそすれ。搦^⑤め候はん」と言へば、もの一人、走りかかて来^⑥なり。今は若君、「限りぞ」と思ふに、近くも寄らで走り返りぬ。「など搦めぬぞ」と言ふなれば、「え搦め候はぬなり」と言ふ。など搦めざるべきぞ。たしかに搦めよ」とて、また異鬼をおこす。同じ事、近くも寄らず、走り返りて往ぬ。「いかにぞ、搦めたりや」、「え搦め候はず」と言へば、「いと怪しき事申す。いで己れ搦めん」と言ひて、かく控つる物走り来て、先々よりは近く来て、むげに手かけつべく来ぬ。「今は限り」と思ひてあるあひだに、又走り返りて往ぬ。「いかにぞ」と問へば、「まことにえ搦め候ふまじきなりけり」と言ふ。「いかなれば」と人だちたる者言ふなり。尊勝陀羅尼のおはしますなり」と言ふ声を聞きて、多く点したる火、一度にうち消つ。東西に走り散る音して失せぬ。なかなかその後、頭の毛よりて、恐ろしきこと限りなし。

し。

さ言ひてあるべき事ならねば、我にもあらで、馬に乗りて親の御もとへ歸りたまひて、心地のいみじく悪しかりければ、やをら臥しぬ。御身もいと熱くなりぬ。乳母、「いづくにおはしましたりつぞ。殿、上の、かばかり夜歩させさせたまふ」とて申させたまふに、「かくおはします」と聞かせたまはば、いかに申させたまはんと、言ひて、近く寄りて見るに、いと苦しげなれば、「などかくはおはしますぞ」とて、身もかきさぐれば、いみじく熱げなれば、「あな、いみじ。にはか」とて、乳母感^⑦ふ。その折にありつる様を語る。乳母、「希^⑧に候ひけることかな。兄人の阿蘭梨に書かせて、御頸^⑨に入れ候ひしが、いみじく痒く候ひけることかな。あな、あさまし。さながらましかば、いかならん」と言ひて、額に手を当てて泣くこと限りなし。二三日ばかり温みたまひたりければ、御折りもはじめ、殿、上、騒ぎたまひけり。暦を見たまひければ、夜行にてその夜ありけり。「なほ、守りは身に具すべきなりけり」と人言ひて、守りを入懸け奉る。

(『古本説話集』)

注

* おこす……………こちらによす。

* 同じ事……………同じように。

* 人だちたる者……………主人のように思われる者。

* 尊勝陀羅尼……………一切の悪道を浄化して災い避ける呪文。

* 温み……………発熱する。

- 14 -

- 13 -

問 1 夜歩^①の説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 18

- ア 夜中、西三条殿の若君と懇意になった女性が都の東を散歩している
イ 夜になると、西三条殿の若君が都の東にいる恋人と出かけていく
ウ 夜中、西三条殿の若君が江戸にいる女性のもとへ出かけていく
エ 夜になると、恋に焦がれた女性が西三条殿の若君のもとへ忍んでくる
オ 夜中、西三条殿の若君が都の東にいる女性のもとへ通っている

問 2 いづくにか隠れんずる^②を現代語訳しなさい。解答番号は 19

問 3 なり^③とあるが、これと文法的性格が同じものを、本文中の波線をつけた語から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 20

- ア 殿は西の大宮よりは東、三条より北^④なり、
イ 「早く鬼^⑤なりけり」と思ふに、
ウ 物もおぼえず^⑥なりぬ。
エ 「など搦めぬぞ」と言ふなれば、
オ 「まことにえ搦め候ふまじきなりけり」

問 4 限りぞ^⑦の解釈として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 21

- ア もはや捕まってしまう
イ これで鬼の攻撃が終わる
ウ 我慢の限界である
エ もう時間がない
オ まだまだ鬼が来る

- 16 -

- 15 -

問 5
⑤ など揃めざるべきで、の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
解答番号は 22

- ア どうして揃め取れないのか
イ ぜひとも揃め取ろうではないか
ウ なんとか揃め取りたいものではないか
エ 何としても揃め取るべきだろうか
オ なぜ揃め取らない方がよいのか

問 6
⑥ 候はについて、敬語の種類と誰から誰への敬意を説明したものとして、もつとも適切なものを次の中から選
び、その記号をマークしなさい。解答番号は 23

- ア 丁寧語で、「手下の鬼」から「指示役の鬼」への敬意
イ 謙譲語で、「指示役の鬼」から「若君」への敬意
ウ 尊敬語で、「作者」から「若君」への敬意
エ 謙譲語で、「手下の鬼」から「指示役の鬼」への敬意
オ 丁寧語で、「指示役の鬼」から「若君」への敬意

問 7
⑦ なかなかその後、頭の毛太りて、恐ろしきこと限りなしの解釈として、もつとも適切なものを次の中から選
び、その記号をマークしなさい。解答番号は 24

- ア この不思議な出来事の後、髪の毛が太くなる怪異に見舞われ、さらにおびえた
イ 危機が去り安心したあと、かえって髪の毛が逆立つほど、恐ろしい出来事だった
ウ 鬼は若君を捕まえられず、髪の毛を逆立てて、ますます恐ろしい姿になった
エ 鬼がいなくなった後も依然として落ち着かず、毛の太い鬼を思い出してしまった
オ この恐ろしい出来事の後、若君の髪の毛は肥大化し、若君も鬼になってしまった

問 8
⑧ 乳母感ふのはなぜか、その説明として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
解答番号は 25

- ア 西三条殿の若君の素行をいましめたところ、ふてくされて寝てしまったから
イ 寝ている西三条殿の若君の身体に触れたところ、体温が異常に高かったから
ウ 西三条殿の若君が女性に恋い焦がれるあまり、高熱を出す恋の病になったから
エ 西三条殿の若君に寄り添って寝てみたところ、かなり高い熱を出していたから
オ 夜中に帰ってきた西三条殿の若君が、体調不良を理由に寝込んでしまったから

問 9
⑨ 兄人の阿闍梨に書かせて、とあるが、何を書かせたのか、該当する語句として、もつとも適切なものを本文中か
ら抜き出し、記しなさい。解答番号は 26

問 10
⑩ さなからましかば、いかならんの解釈として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしな
さい。解答番号は 27

- ア 鬼さえいなければ、こんなに苦しまなくてよいのに
イ 体調がもどらないので、どうしたらいいだろうか
ウ あの時、鬼に襲われなければ、どうなっただろうか
エ 童の言葉に従わなければ、こんなことにはならなかったのに
オ お守りを身につけていなければ、どうなっていただろうか

問 11
⑪ その夜の説明として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 28

- ア 体調が完全に回復した日
イ 熱が下がりはじめた日
ウ 元服した日
エ 鬼に出会った日
オ 兄に会った日

問 12
『古本説話集』と同じジャンルの作品を、次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 29

- ア 海道記 イ 方丈記 ウ 歎異抄 エ 愚管抄 オ 十訓抄

第三問【選択問題 現代文】

次の文章は、読書について述べられたものであり、(直感的な(単純な)困難)と(複雑な困難)が読書の障害になることを指摘した上で論じられている。以上を踏まえて文章を読み、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語句については、注を参照しなさい。

読書には二種類の困難があります。ひとつは、直感的なものです。本を手にとるのが億劫であったり、読み始めたり読み続けたりするのが億劫であったり、読み終えたくないと思ったり、誰とも解釈を共有できないかもしれないと感じる困難です。読書にまつわる困難は、読み始めない自由、途中で読むのをやめる自由によってその都度は回避可能です。その自由を自覚し、読むのどこか躊躇することを肯定することが肝心です。その躊躇に対する気負いや気まずさは薄れ、以前よりは読めるようになるものです。

問題はもうひとつのほうの困難、「複雑な困難」と呼んできたものです。パズルのように意図的に読み解きにくく書いてあったり、その文章を読むために求められる前提知識が際限なく求められたり、客観的な根拠を保留して「信じる」ことを求められたりするような書物です。これもまた読まない自由を読者に許す困難ではありますが、単に繰り返し読むだけでは何度読み直しても腑に落さない厄介さがあります。

再読——つまり書物を繰り返し読むと、最初に読んだとき(あるいは何度目かに読み直したとき)と次に読むときのあいだに、ほかのことを読者が経験する時間がさしはさまれることになります。ほかの本を読んで知識を得たり考え方が変わるということでもいいでしょうし、体調が変わるだとか、住んでいる地域の季節が変わるだとか、学校や勤め先の環境が変わるということもある

でしょう。人間関係で新しい友人知人ができたり、あるいは関係が悪化したり、誰かを亡くしたりする経験もあります。

そういった経験がさしはさまれることで読者自身が変化して、それからかつて読んだ本を読み返すとき、人間の基干機能である「自分に都合の良いことだけを読み取る」が働いたとしても、かつては自分の状況が変化しているので、以前には気づかなかった部分に意識がつけられる可能性があります。

読書や再読を繰り返すうちに、自分の読み取れる内容が変化することにも繰り返し気づかされるようになります。読書に慣れ、再読に慣れるとは、書かれていないことが変わっていないのに、読むたびに読みとられる内容が変化することを知ることでもあるのです。

かつて読んで意味不明だった部分について、前よりもわかるような気がする場合にかぎらず、以前にわかったつもりになっていた部分もわからなくなってしまう場合もあります。ここで自分の頭が悪くなったのだからと考えるのは、ときには正しい場合もあるかもしれませんが、ひとつにはかつてわかったつもりになっていた部分について解像度が高まった結果として理解困難な部分に気づけるようになったのかもしれません。初読時に「簡単なこと」として読み飛ばしていた箇所について、より正確に近い読みかたができるようになったということですね。

読書に対する躊躇が正当であることを自覚し、好きなときに好きな本を読めるようになるのは、そのタイミングをからだで覚えるまで読み捨てを繰り返す必要があります。そしてその自由を実感できるようにまで読み捨てに慣れたとしても、読み取るのが困難な記述に直面することは珍しくありません。読書を繰り返すうちに、やがてこの読み取り困難な記述にも慣れてきます。どうせ困難なのだから今回は読み飛ばそうと決めるのも、今回は腰を据えて噛み締めてみようと思えるのもまた読者の自由です。

意味を理解するのに困難を感じる記述に出会ったときに、その意味を深く考えずに保留して先を読み進むこと、つまり読み飛ばす⁴⁰ということ、意味を噛み締めてそれを解きほぐそうと試みることにあいたには、二者択一ではないグラデーションがあります。

「どの程度その困難につきあい、どれくらいで困難に付き合うのを諦めるのか。読み取り困難な記述を含む本を読むことに慣れれば慣れるほど、このグラデーションは多様になっていきます。」

繰り返し読むことを前提にした読書であれば、この困難について考えるのはこれくらいにして、気が向いたらまた読もうと腹をくくって、ある程度の「読み飛ばし」をすることが可能です。いつかまた読むリストのようなものをつくって、そこに書名を追加していくのもいいでしょう。どこにひっかけたのか、メモをしておくとか再読の際の参考になります。これも面倒な作業なので、ある程度の慣れを得てからのほうがいいと思います。

読書に慣れること、読解困難な記述に慣れることの先には、その「奥」があります。再読するときで検討を保留する、あるいは再読時に再検討することを残しておくという領域です。意識的に保留するだけではなく、読み解けていないことを自覚してないものもそこに残されていることに、再読時に気づかされることもあるでしょう。

読んでも読んでもそういつた「残り部分がある」と思わせてくれる本があります。汲めども尽きない泉のような、何度でも読める本は「古典」と呼ばれます。ひとは学びを得るために読書をするわけではあませんが、た心ば読み返すたびに異なった教訓を与えてくれる本といふのは確かに存在しているのです。プラトンは「語るべき人々に語り、黙すべき人々には口をつぐむ」言葉として指し示したかったのは、読者が「語るべき人々」になったときにその内容を「語り」、読者がまた「黙すべき人々」でしかないときには「口をつぐむ」、そんな言葉のことなのかもしれません。

読者が「語るべき人々」であるタイミングになれば、そこに読まれる言葉は読者の心に刻み込まれるかもしれませんが、その記述が読者が「語るべき人々」として認める資格として、プラトンは「知恵」を要求します。これは単なるパパラの知識ではなく、読者に何かの資格を与えるような体系や経験を含むものです。(中略)

書かれた文章は、誰にでも読むことができます。ただしそこで使われている文字を読み知識や、そこで書かれていることを想像するための経験が必要になります。「打ちひしがれたような優しさ」という文字列を見て「打ちひしがれる」という言葉の意味が

わからないひとは「誰にでも読める」はずの文章を読むことができません。そして言葉の定義を知り、その意味をわかったつもりになっても、打ちひしがれたような優しさの意味はすぐにはわかりません。誰にでも朗らかに優しさを振りまき幸福なひとには、あるいは逆に、誰にも優しくできないようなひとにも、なかなかわからない文章なのです。

それでも初読時に「打ちひしがれたような優しさ」の理解の困難さを無視して読み進めることはできます。少し時間をおいてもしまた「アガタ」を読み返すことがあったとして、時間をおいているあいだに経験したことや知識を得ることによって、「打ちひしがれたような優しさ」に感銘を受けるようになるかもしれません。本を手にとる億劫さ、読み始める億劫さに躊躇することに慣れ、また読解困難な記述に慣れて、初めてこの感銘を味わうことができます。

しかしその感銘が、自分勝手な読み取りでしかないという可能性はまだ残っています。もちろん、自分勝手な読み取りをする自由もまた読者には許されています。しかし自分がその記述にとつて、プラトンは「語るべき人々」になっているのかを判断する方法はありません。本は繰り返し読めるものなので、ひとたび感銘を受けたと思っても、また読み返したときにもっと深い、あるいは別の感銘を受ける可能性が常に残されています。前に読んだ時にはわからなかったことに気がつくためには、それを繰り返し読む必要があるのです。そして、繰り返し読むことによって「慣れ」は深められています。

(永田 希「再読だけが創造的な読書術である」)

注

*「語るべき人々に語り、黙すべき人々には口をつぐむ……」プラトンの作品『パイドロス』の一節。

*「アガタ」……「打ちひしがれたような優しさ」という表現の典故である。

フランスの作家マルグリットデュラスの戯曲。

問 1 a・bの読みをひらがなで記さない。解答番号は a 30 b 31

30 都度^a 31 厄介^b

問 2 ① 読書には「二種類の困難があります」とあるが、それらの「困難」について説明したもののうち、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 32

- ア 直感的な困難とは、読書という行為そのものを躊躇してしまうことである
イ 直感的な困難が解消されれば、本に対する読者の理解度は高くなる
ウ どちらの困難も、読まない自由が与えられていれば解消することができる
エ 複雑な困難が解消されれば、前提知識は不要になり普遍的な読解が可能となる
オ 複雑な困難とは、表現の難しさのために本来できるはずだった読解が妨げられることである

問 3 ② その自由²とあるが、具体的にはどういうことか、それを表したものとしてみても適切な箇所を、本文中から二十字以内で抜き出し、「こと」につながる形で、記しなさい。解答番号は 33

問 4 ③ 書かれていることが変わっていないのに、読むたびに読みとられる内容が変化する³とあるが、書かれていることが同じなのになぜ読みとられる内容は変化するのか、その理由を三十字以内で説明しなさい。解答番号は 34

問 5 ④ 読み飛ばすという⁴ことと、意味を噛み締めてそれを解きほぐそうと試みる⁴こととのあいだには、二者択一ではないグラデーション⁴がありますとあるが、読み飛ばすということと、意味を噛み締めてそれを解きほぐそうと試みることとの関係について述べたものとして、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 35

- ア 前者が有効な本と、後者が有効な本とがあるので、本によって両者の使い分けが必要となるということ
イ 未熟なうちは前者の読み方になるが、経験に応じて段階的に後者に移行すべきだということ
ウ 実際の読書においては前者と後者は区別することができず、理念として連続しているということ
エ 前者にするか後者にするかは読者の自由であって、どちらかひとつに決めるべきではないということ
オ どの程度まで後者をつきつめて前者に移行するか、その線引きは様々にありうるということ

問 6 ⑤ 説明解けていないことを自覚していないもの⁵とあるが、ここではどのようなものを指しているか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 36

- ア 前提知識が際限なく求められる部分
イ 以前は読み捨てていた部分
ウ かつて読んで意味不明だった部分
エ わかったつもりになっていた部分
オ 再検討するために残していた部分

問 7 ⑥ プラトンが「語るべき人々に語り、黙すべき人々には口をつぐむ」言葉として指し示したかったのは、読者が「語るべき人々」になったときにその内容を「語り」、読者がまだ「黙すべき人々」でしかないときには「口をつぐむ」、そんな言葉のことなのかもしれません。について、次の問いに答えなさい。

(1) 「語るべき人々に語り、黙すべき人々には口をつぐむ」とはどのような意味か、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 37

- ア 伝えたい人に対しては内容を明らかにし、伝えるべきではない人には明かさない
イ 自分の意見を持つ人は自らの言葉で語り、意見を持っていない人は発言を控える
ウ 正しい心を持つ人には解説できることでも、社会に害をなす人には理解できない
エ その言葉を積極的に世の中に広めてくれる人を歓迎し、そうでない人を批判する
オ 世間に影響力を持つような偉人には響き、多くの凡人たちにとっては役立たない

(2)

傍線部で筆者はプラトンの引用に独自の解釈を加えているが、元となるプラトンの引用と比べ、その独自性はどこにあるか、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 38

- ア プラトンが重視する「知恵」よりも、記述を読むタイミングが重要だと考えているところ
- イ 一人の同じ人間が「黙すべき人々」から「語るべき人々」へと変化することを示唆しているところ
- ウ 学びを得ることについてプラトンが行った指摘を、読書全般の話へと拡大しているところ
- エ 元の比喩的な表現をあえて字義通りに解釈して言葉を意志のある生き物のように表現しているところ
- オ 言葉を「語る」資格を得るために、経験や体系的な知識が必要だと訴えているところ

問 8

筆者の考える「再読」の効用はどのようなものか、適切ではないものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 39

- ア 意味が読み取れなくても、保留して読み飛ばすという選択が可能になる
- イ 読解困難な記述に対する慣れが深められていく
- ウ より精確に近い読み方ができるようになる
- エ 読者に「知恵」を与え、「語るべき人々」へ昇華させる
- オ 同じ本からより深い感銘を引き出す可能性を秘めている

問 9

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 40、44

- 40 直感的な困難は、読み捨てを繰り返し、気負わず読めるようになることで解消できる
- 41 ある記述を読み取れるだけの「知恵」を持つているかどうか、自分で判断することはできない
- 42 読書に慣れるとは、文章の細部を注意深く観察することに慣れるということである
- 43 再読するときのためのリストやメモを作成することで、「読み飛ばし」を回避することができる
- 44 「古典」とは、何度読んでもまだ読解の余地を感じさせ、読むたびに新たな学びを与えてくれるものである